

魅惑的で啓蒙的なサイ

ガーヤトリー グプタさんとの対話

第一部

ガーヤトリー グプタさんは1985年にアナンタプールにあるシュリ サティヤ サイ大学のアナンタプール キャンパス（女子大）の英語の修士課程を卒業しました。彼女は1945年、ババがまだ19歳だった頃から交流があるという家庭に育ちました。彼女の家族はサイの帰依者の間ではクッパムファミリーとして知られていました。四世代にわたり、ガーヤトリーさんの家族は代々、バガヴァン ババに帰依し、神との体験という豊富な宝箱を持っています。家族のバガヴァン ババとの驚くべき体験の数々は、ハワード マーフエット氏の著書、『*Man of Miracles*』と彼女の叔母、ヴィジャヤンマー ヘマチャンド女史の『アンニャター シャラナム ナースティーあなただけが私の救い主です』にも記されています。

以下は、ラジオ サイによるインタビューの一部です。

1945年、初めてのパーティ訪問

ラジオサイ（以下、RSと表記）：ラジオサイの番組によろこそおいでくださいました。まず、プッタパーティからはかなりの距離がある、アーンドラ プラデーシュ州、チットウル地区にあるクッパムに住んでおられたあなたのご家族が、どのようにしてスワミを知るようになったかを教えてください。

ガーヤトリー グプタ女史（以下、GGと表記）：プッタパーティからはちょうど100マイル（161km）離れています。

RS：その当時は通信手段もあまりなく、道路もそれほど整備されていなかったと思います。その状態で100マイルというのはかなり遠距離だと思います。それで、どのようにしてババのことを知ったのですか？

GG：1945年当時、クッパムから、私の家族は牛の引く荷車に乗って、また、時には頭や肩に荷物をのせて、石の上を飛びながら川を渡って行ったそうです。スワミのダルシャンを受け、スワミの側にいられるなら、家族たちは何でもしました。

私の伯母、アナンタ ペッダンマ（ペッダンマは母方の伯母という意味）が、私の祖父母に話したのです。そして当時、まだ若い青年であった「サッティヤ」〈真実〉という名前が祖父に強い印象を与えたようです。（当時、スワミはまだバガヴァン〈尊神〉とは呼ばれていなかった）

すぐに祖父は「では、スワミに逢いに行こう」と決意したようです。ですから、それが初めての訪問です。間もなく皆はプッタパルティの門をくぐりました。それは皆にとってまるで天国のように感じられたそうです。スワミの姿を目にした途端、スワミは彼らに駆け寄り、「来なさい、来なさい、ついにあなたたちは来たのですね！」と言われました。

RS: ワーオ！ それは、早かったですね。

GG: 彼らはそれ以来、しばしば訪れるようになりました。それらの訪問のとき、祖母は温かいドーサやウプマ、ラギー（四国稗）で作ったラッドゥー（甘いボール状のお菓子）を作って持って行きました。スワミはこのラギーで作ったラッドゥーがとてもお気に入りでした！

生き返った祖父 — 葬式が復活祭に

家族は決して裕福ではありませんでしたが、それでも機会があるたびにプッタパルティに足を運んでいました。

数えきれないほど奇跡を目の当たりにしましたが、中でも忘れられないのは私の祖父がどのようにして息を吹き返し、復活したかです。

これは生まれ変わり（再生）です。祖父は亡くなり、祖母は現代版のサティヤーヴァン サーヴィトリーのように突っ立っていました。（サーヴィトリーは死の神ヤマの手中から夫サティヤーヴァンを取り戻した）

これはプッタパルティで起りました。その時、祖父が亡くなってから三日ほど経っていました。遺体は膨張していました。スワミの超自然的な能力について風刺的な注目をする批判家は大勢います。彼らは、「何だって？ あなたはこの若者にあなたの夫を甦らせてほしいのか？ それはあり得ない。関係者らがスワミのところへ遺体を運ばせてくれるかね？」と言いました。しかし、祖母は熱烈な信頼と共に頑固に立ちほだかり、スワミが遺体を動かすよう指示されるまで、ここから少しも動かない、と彼らに言いました。

そして、三日目にスワミはベランダに出て来られました。スワミはこちらをちらっと見て、

「ラーダンマ、どうした？ 何をしていますのです？」とおっしゃいました。スワミはすべてをご存知です。それでも何も知らない子どものように、スワミは

「ラーダークリシュナはどこですか？」とお聞きになりました。

そして、階段を下りて祖父母の部屋に行かれました。スワミは一分間ドアを閉められました。スワミが再びドアを開けられた時、祖父はベッドの上でまっすぐ座り、スワミが注いでくださった香り高いコーヒーをすすっていました。祖父は、

「スワミ、どうしたのですか？ どうしてあなたがここにいらっしゃるのですか？」と聞きました。スワミは大変優しく、

「おお、戻って来ましたか？ 何でもありません、さあ、コーヒーをお飲みなさい」とおっしゃいました。

何かは今から起るのではないかとそこに集まった数百人の帰依者たちは、

「ボーロー バガヴァーン ババ キ ジェイ！」(尊神ババ様、万歳！)、「あなたは偉大な魂です！」、「偉大な魂のババ様、万歳！」と叫び始めました。人々は口々にスワミを讃えて叫んでいました。これがクッパム ラーダークリシュナの人生で起った最も印象に残った奇跡です。

RS : では、葬式の代わりに、完全なる甦りが起こったわけですね？

GG : そうです。



RS : そして、聖典や聖書で起るようなことがここであなたの家族の中で起こった。この出来事はあなたや家族にとって、スワミに対する信仰をより大きなものにしたのでしょね。

GG : この出来事で、スワミはご自分が全知、全能、遍在であることを証明されました。一つお話ししたいことがあります。クッパム家とスワミとの結びつきはヒューマン（人）としてだけではなく、ヒューメイン（心の通った）な — 純真で、純粹で、汚れのない真の関係なのです。そこには、数えきれないほどの出来事や奇跡、リーラ（神の遊戯）があります。その中のいくつかをお話ししたいと思います。

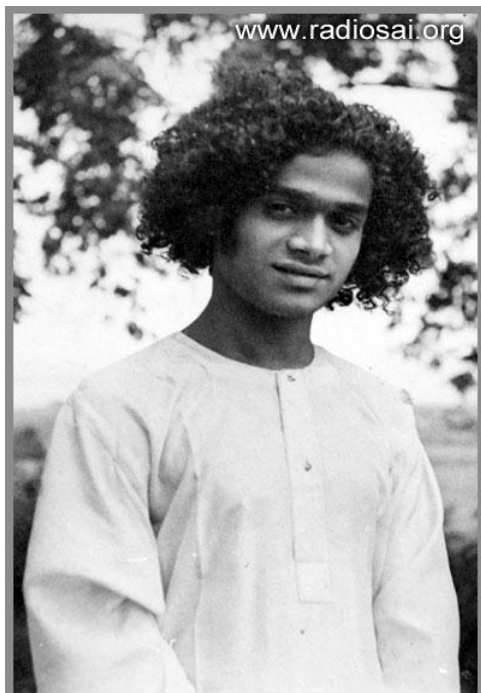
RS : もちろんお願いします、どうぞ話してください。

GG : この出来事の後、クッパム家の者たちは皆、徐々にスワミのことだけを考えるようになりました。それと、実はこの「スワミ」という呼び名は、クッパム家の者たちが最初に私たちの愛するスワミに対してつけた呼び名なのです。そして、ラーダンマとラーダークリシュナ夫婦の三人の娘たち、クッパム ヴィジャヤンマー、クッパム サラランマ、プレーマと四人の息子たちは、護衛のようにスワミの面倒を見ていました。スワミは彼ら一人ひとりにあだ名をつけられました。アマレンドラは「アンバ」、クリシュナムルティは「キチャチ」、そして時折、スワミはキチャチのことを「ピチャチ (悪魔)」と呼んで叫んだりしました。私の母と叔母、サララとプレーマは、誰も思いつかないような変わった名前、パコラ (豆粉の衣で作った天ぷら) とボンダ (丸いコロケのような揚げ物)、と呼ばれていました。スワミはいつもユーモアたっぷり、すべての人のハートの中に喜びの燈をともしました！ ここで、今、思い出してもアーナンダ (至福) とパラマーナンダ (究極の至福) をもたらず出来事をお話ししたいと思います。

若い頃のスワミに関する祖母の思い出

私たち孫は皆、夏休みと冬の休暇に、祖母が夜空の下の夕食に招いてくれる、祖父母と一緒に過ごせる特別な夜を楽しみにしていました。私たち 8 人は祖母を囲んで円くなって座りました。それは、クッパム家において、特にすばらしい大変敬虔な雰囲気にも包まれた夜でした。私たちはそれぞれ手を伸ばして、「アッヴァー アッヴァー、チェッパッヴァー、スワミ カタルー チェッペンダッヴァー チェッペンダッヴァー」(おばあさん、どうかスワミのお話をしてください) と頼んでいる間、祖母は一人ひとりの手のひらの上に、お米のボールを置いてくれました。

RS : スワミに関するお話ですか？



GG : スワミに関することだけです。そして、祖母は言うのでした。

「ちょっとお待ちなさい…じゃあ、プッタパルティが静かで、今のようなではなかった頃の話しましょう。その頃、プッタパルティは小さく辺りな村でほとんど森のようだったのよ、小さな森のような。ある時、何が起こったと思う？」
いつも、このように始まるのでした…

「昔、スワミはまるで鹿のように森の中へ飛びはねて走って行かれたわ」

「アッヴァー、エンドウク？ (おばあさん、どうして?) どうしてスワミはそのように森に逃げ込んだの？」

「アンバとキチャチはスワミの後について行き

ました」

「何のために？」

「頭にオイルマッサージをするためよ」

GG: スワミの髪はカーリーで量が多だけでなく、魅力的な分け目がありました。まだ今のような完全な球形の髪にはなっていませんでした。

RS: 髪には分け目があったのでしょうか？

GG: スワミは髪を分けておられ、とても魅力的だったと祖母は言っていました。祖母が言うには、スワミはとても運動神経が発達していたそうです。スワミご自身が参加して、いろいろな催しが行われていたそうです。現在、ヒルヴェースタジアムでスワミの学生たちが行うスポーツ大会は、スワミがいかにスポーツを愛しているかを示しているかを証明しています。

スワミの楽しみと悪戯

スワミは当時、色々な遊びをしておられたそうです。昔はすべての人々、すべての帰依者を川に呼んでおられました。

スワミはチットラーヴァティー河をこよなく愛されていました。ほとんどの時、帰依者たちは皆、川の土手で遊びました。スワミは、

「さあ行こう、川まで走って競争しよう。一番になった者には特別にパーダ ナマスカル（御足に触って祝福を頂くこと）をあげよう」と言われました。今では、私たちはパーダ ナマスカルを頂くために何年も祈り続けます！ 当時、スワミは全員にパーダ ナマスカルを受けるよう強要しておられました。そして、太った私の叔父たちは、ナマスカルを受けるために前屈みになるのを苦しめていました。叔父たちは、

「スワミ、あなたは私たちに何回ナマスカル（挨拶）をお望みなのですか？」と聞いたものでした。これは、叔父たちの正直な気持ちでしたが、実際はスワミが何を言われても、叔父たちは即座に言われる通りにしていました。

スワミが遊んでおられた別の競争は、カルパ ヴリクシャ トゥリー（願望成就の木）まで一番先に着いたものが勝者、というものでした。そして間髪を入れずに、またもや勝者はスワミなのでした。

RS: スワミは、ただ単に頂上に現れたのでしょうか！

GG: 瞬きをする間にそこにおられました。「ほら、もう着いた。私が一番だ」と。もう一つ、スワミが愛された遊びはブランコでした。その頃は丈夫なロープを使って井戸から水をくみ上げていました。スワミはそれらのロープを使い、よく育った大きな木の上の方の枝に結びつけてジューラ（ブランコ）を作り、随分高いところまで漕いでおられました。帰依者たちは、



「スワミ、もう十分です！ 十分です！」と叫びました。スワミは幸せそうに笑い、喜びはブランコの高さまで届いているかのようにでした。スワミはあたかも天まで届き、地上に降りて来られているかのようにでした…それはまるで、アホウドリやペリカンが海中めがけて深いところへ飛び込む様子に似ていました。

昔、スワミはほとんどの時間をチットラーヴァティー河の土手で遊びに興じていました。ある時、スワミは奇抜な競争を考え出されました。それはトゥルシー（ホーリーバジル）の木が生い茂る場所でした。スワミは、

「トゥルシーの枝を集めてガーランド（首にかける花輪）を作りなさい。私の背丈まで作った者が優勝です」と言われました。ですから、皆、美しいガーランドを作るためにバスケットを手にし、サリーをたくし上げてトゥルシーの葉を摘みました。スワミも参加されました！ スワミは指で素早く

摘み、バスケットに山盛りのトゥルシーを集めました。スワミは、それは丁寧に、完璧に、芸術的にガーランドを繋いでおられました。そしておっしゃいました。

「さあ、皆、私にガーランドをかけなさい。では先ず私の作ったものから始めよう」スワミが作られたガーランドは、完璧にスワミの背丈に合っており、スワミが勝者でした！

サイのラーサリーラに関する祖母の思い出

そこで、私たちは尋ねました。

「スワミ、私たちの作ったガーランドはどうしますか？」

「OK、では違うアイデアをあげよう。トゥルシーをボールにしてしっかり括りなさい」

今ではプラスチック繊維で出来たサッカーボールなどもありますが、当時はそのようなものは手に入りませんでした。手に入るものはすべて自然のもので、スワミはそれを使うように言われました。ですから、この固く括り上げたトゥルシーのボールでスワミは新しいゲームを考えられたのです。スワミは、

「男は皆一方の側に集まり、女は反対側に集まりなさい」とおっしゃいました。そして、スワミが真ん中に立たれ、皆にトゥルシーのボールを投げて長い間遊びました。皆が疲れると、スワミは皆をオールドマンディール（以前のスワミの寺院）

に連れて帰られました。ある人が「スワミ、どうして私だけと遊んでくださったのですか？」と尋ねると、他の人が「違うよ、スワミは私だけと一緒だった」と言いました。また他の人も、「スワミは私だけと遊んでくださった」と付け加えました。

そこでスワミは、
「何が起ったか知っていますか？ 私はサイクリシュナです。あなたたちは皆、ラーサリーラ（牛飼いたちが一人ひとりクリシュナ神と踊った奇跡）を体験したのです。ですから、皆さんはゴープーカー（クリシュナを愛し、一緒に遊んだ牧女たち）なのです。私はあなた方一人ひとりと遊びました。これはアーナンダ（至福）ではありませんか？」と説明されました。スワミは、その帰依者たち全員に至福の頂点を体験させてくださったのだと思います。

RS : ということは、各自が自分だけのための遊びだと思っていたわけですね？ スワミは皆に、自分は特別だと感じさせてくださった。

GG : 皆が、他の人が誰と遊んでいるかを知らないまま、サイクリシュナと一緒に遊んでいたのです。皆が自分自身の遊びに夢中になり、サイクリシュナを自分だけのものだと感じていたのです。

RS : そして、あなたのお母さんや兄弟姉妹たち、おじいさん、おばあさんは、当時、そこにおられたのですか？

GG : 祖父母はマンディールの中で掃除や祭壇作りに忙しくしていました。なぜなら、一団が急にマンディールに入ってきて、スワミが「さあ、バジャンを始めよう」と言われることがあったからです。食事を含めたすべての用意ができていなければなりませんでした。祖父母たちは1年のうち9ヶ月はプッタパーティにいて、スワミと一緒にする日々の活動を楽しんでいました。

RS : そして、あなたの叔母上、ヴィジャヤクマーリさんの著書、『アンニャター シャラナム ナースティ』（全託する以外に何も無い）には、これらすべての出来事と、他にも多くのことが詳しく書かれていると思います。あなたがこのような話を聞きながら成長したというのは素晴らしいことですね。

GG : この本はスワミご自身によって祝福されました。ババ様はまた、この本は将来奇跡の本になるだろうとおっしゃいました。そして、すべての帰依者はこの本を祭壇に置いておきなさい、そうすれば、すべての悩み、困難、悲しみを手放すことが出来る。この本を大変敬虔な本として持っていなさいとおっしゃいました。最近でもスワミは叔母のことをお話しになります。スワミはインタビューの中で帰依者たちに『アンニャター シャラナム ナースティ』を書いた女性に会いなさい。彼女が私のところに来始めた頃は本当に可愛い女の子だった。今は歳をとってしま

った。イースト プラシャーンティ（東棟の宿舎）に行って、彼女に会いなさい」と言われたそうです。

「ラジオ サイ グローバル ハーモニー」 2012年8月11日付

http://media.radiosai.org/journals/vol_10/01AUG12/04_gayatri_01.htm